いやだなあ。ぼくもいつかそうなるのかなあ。いくら視覚や聴覚、触覚そのものは失わなくても、感情がなくなるなんて、絶対いやだ。最悪、ほんの少しでも味覚さえ残っていれば。ぼくは食が命だから！　味覚強化剤ってのが本当にきけばいいな。

ああ暇だ。もう宿題は全部やったし、何しようかな。ゲームは下手すぎて楽しめないし、マンガは絵と文字を両方読みすすめるのが苦手だし、まだ観ていないアニメは有料コンテンツばかり。持っている本はぜんぶ読み終えちゃった。登録しているEブックライブラリーにも、もう読みたいのは残っていない。しかたないから麻（あさ）に本を借りようかと思って、SNSを送信した。

〈欲しけりゃ取りに来な。あ、やっぱ来るな〉

おかしいと思った。麻は絶対にぼくを部屋に入れてくれないからさ。どうしようか考えていると、いきなり麻がぼくの部屋にやってきて、紙の本を数冊置いていった。そういえば麻はEブックがきらいだったな。

麻が貸してくれた本を手にしたら、赤面した。表紙のイラストが恥ずかしくて無理なシリーズはごっそりドアのそばに置いて、残りの分厚い一冊を手にする。

米国作家によるそのファンタジーは、バックハグをしている変な服装（異世界風）の男女。っていうか、女の人は人間じゃなさそう。いやいやいや無理。

でも、ぼくだっていつか恋愛をするだろう（相手が人間でありますように）から、勉強だと思って読もう。

バックハグのほうを読みはじめ、数分後、いつのまにか楽しんでいる自分に気づいて、あわてて本を閉じた。麻と同じ沼にはまりたくない。でも続きが読みたい。

なんていう平和な葛藤をしていると、家族チャットにメッセージが来た。かあさんだ。

〈国内便が再開したから、一番早い便を予約した。マスクも使い捨て手袋も使うし、心配しないでね〉

〈チケットが取れて良かったね。気をつけてね〉と、ぼく。

〈了解しました〉と、とうさん。

ニコニコ絵文字だけは麻。

〈家に入らず事務所で二週間隔離生活をするから、チャットで連絡しあいましょう。事務所にシャワーもトイレもソファベッドも電子レンジもあるから大丈夫よ〉

〈オッケー。待ってるよー〉とぼく。

とうさんと麻は、いいね絵文字だけ。

とうさんは家庭内別居中だからしかたがないとして、麻って冷たいよな。

空港から特別対応のハイヤーでかあさんが帰って数日経ったけど、会っていないから実感がわかない。お弁当もべつべつにオーダーしているし。

ところが、今日になってショッキングなことが起きた。